

水

と縁があることが都市が生まれる条件ではあっても、都市は人間が営々とつくりあげてきた巨大な人工物であることは間違いない。太陽はもとより、太陽があらって生まれた地球上の自然も未来永劫ではなく、何億年の歳月をかけて移り変わっていくのだとすれば、そのなかでつくられた都市が永遠性を持つなど考えられない。さらにいえば生物の種は、発展を続ければ続けるほど存続が困難となり、遂には滅亡するという。人権が尊重され医療が進歩し、その結果、近々85億人に達しようとする人類は永遠性を自らの知恵で失った。われわれがいま生きる都市はいつか滅び廃墟になるだろう。世の中の風潮からみて、こんなとんでもない悲観論をあえて持ち出すのもぼくの原体験によっている。戦時に中学生だったぼくは東京大空襲の夜、地上の赤い炎を翼に反射してきらきらと輝かせながら悠然と飛ぶB29の光景に感動し、翌朝、眺めたはず限りの焦土の姿に、比べものない美しさを感じたのである。なにひとつない、かつて繁栄した都市の滅亡のあとと茫漠たる地平。そういえばローマもアテネも廃墟が美しい。ぼくは世界の都市の姿で最も美しいのは、地球が滅んで5000年たった後のニューヨークではないかと夢想し



白く明るい街並みに覆った モンマルトル界隈 パリ

ている。もっともそれを見ることはできないが。

1960年代、フランスの文化相アンドレ・マルローが提唱して実践されたのがパリの化粧直し作戦である。数百年の歳月が生み出した煤んだ灰色の建物群、それは日本人憧れのパリの街の色合いであったが、きれいさっぱり建築当初の明るい色の街並みが蘇った。いま日本では古い建物こそが貴重とされている。昔ながらの街並みを守ろうという動きも活発である。あまりにも急速に、あまりにも多くの街が、経済性追求の行動を否定まな事業が単に歴史の

廃墟と歴史 そして文化

わが都市論



岩城 宏之

いわき ひろゆき

1932年東京生まれ。東京芸大打楽器科中退。NHK交響楽団正指揮者、メルボルン交響楽団桂冠指揮者、オーケストラ・アンサンブル金沢音楽監督、石川県立音楽堂芸術総監督、札幌交響楽団桂冠指揮者、日本芸術院会員。近著「音の影」(文藝春秋)



加賀百万石の城下町 金沢 兼六園の象徴 微軫(ことじ)灯籠

大いに疑問であって、かつて金沢の街をどう思いますか。という問いに対して、美しい街、情趣のある街、という当然期待された答えを裏切り、汚い街です、といて質問者を慌てさせた。金沢には卯辰山があり浅野川が流れ、兼六園や武家屋敷があって、点として、また線としては美しい。しかしそれ以外は戦災を受けなかつただけにただ雑然とした街が広がっているのだ。

とはいっても金沢はいい街である。なぜか。歴史と文化と伝統がこれだけ活かされている街はない。江戸期加賀藩は、徳川を怖れてひたすら文化を醸成した。閉ざされた冬という気候もあって、百工比照といわれるさまざまな工芸を興し、能は武家だけでなく町民のたしなみとなり、百万石という財政の豊かさも加わって、地域として自立しながら、都市の誇りを際立たせてきた街である。いまでいう地方分権



金沢駅前 石川県立音楽堂のエンタランス いずれ滅びるものの、都市の文化こそ、今を生きるわれわれの喜びではないだろうか。

ていたが、金沢はその典型ともいえるだろう。とくに戦後は目ぼしい産業もなく高まった結果、金沢の都市文化はいっそう熟成した。アンサンブル金沢をはじめたとき、三年後に専用ホールをという話が十数年たつた。石川県立音楽堂は日本一といいたいほどの見事なホールである。洋楽と邦楽二つのホール、専属のオーケストラを持つ我が国唯一のホールなのだ。人間はあらゆる生き物で唯一の生き物であって、この遊びの大切さ、いわば文化というものの価値をこのホールで感じている。さらにこのホールを金沢駅近に置くことで、その魅力によって広域からも注目を集めた。またかな都市戦略もすすめて成果を上げているのである。引き続いてこの秋、香取市立美術館が開館し、二つの中核施設によって都心が二眼レフ構造となり、街に深

私

は山梨県韮崎市に畑を持ち、東京の家と往復する日々で

る。かれこれ十三年になる。富士山や南アルプスが眺望できる畑は三百坪ほどで、梅の木が十一本、桃や山椒の木もある。畑では季節の野菜のほとんどを作っている。完全無農薬で除草剤も使わないから虫もたくさんいるし、夏場は雑草との戦いだ。夫と二人、すべて手作業の畑仕事である。「あなたがなぜ農業を？」とよく聞かれるのだが、考えてみると、絵描きだった私の父は自宅の庭で本格的な農業をしていたのだ。生ごみを堆肥に替え、土作りをし、ダリアや水仙の花を立派に咲かせていた。ふるさと兵庫県の芦屋市は、神戸や大阪、京都にも近く、山や海が近く、また町中を芦屋川が流れていて、緑豊かなゆつたりとした町である。学校の帰りに川へ入り魚と遊んだり、父と山へスケッチにも出かけた。おそらく幼い頃の体験が、今私に田舎暮らしをさせているのかもしれない。

山梨での暮らしは自然相手なのでかなり体力がいる。春になると、まず畑を三ツ又の鍬で耕し、堆肥や枯葉をいっぱい入れ、野菜達がすくすく育つようふかふかの寝床を用意する。最初は鍬を持つ手にも力が入り、体中の筋肉が痛くて困ったものだ。マ

私の都市ぐらし 田舎ぐらし

岸 ユキ

きし ゆき

兵庫県芦屋市生まれ。神戸松蔭短大卒。西野バレエ団所属。数多くのドラマ、司会、リポーターをこなす。NHK「明るい農村」等、農業番組で日本の農山村を歩く。山梨県韮崎市文化ホール館長。新美術協会会員



きた大根はとても高いものについて時間も畑にいとバケツで水をかぶ完全武装をしているからだ。それでお湯に入り筋肉をほぐし、畑から穫と、あー生きているんだという実感がわいてくる。夏は、日中暑くても夜は涼しく冷房のお世話にならず、毛布をかけてぐっすり眠る。都会のヒートアイランドから見ると別世界だ。もちろん都会には田舎では得られない便利さがあり、それはそれで魅力がある。しかし都会ではどうしても得られないものが田舎にはあるのだ。

ッサージ代が随分分かり、最初でしまった。また夏の農作業は、二つほど汗をかき。虫よけのためにも近くに温泉がたくさんあるので、れたての野菜をバリバリいただく

がわいてくる。夏は、日中暑くても夜は涼しく冷房のお世話にならず、毛布をかけてぐっすり眠る。都会のヒートアイランドから見ると別世界だ。もちろん都会には田舎では得られない便利さがあり、それはそれで魅力がある。しかし都会ではどうしても得られないものが田舎にはあるのだ。

ところで、二十一世紀は災害の世紀とも言われている。実際、世界中で地震や水害、かんばつなどが起きている。私のふるさとを襲った阪神淡路大震災の事も記憶に新しい。



すべて手作業 無農薬の野菜づくり

実家も被災し、家は半壊した。東京にいた私に母から「とにかく生きているから。」と短い電話があった。戦前に建てられた木造の古い実家は必死で持ちこたえ、半壊ですんだのだ。あとで母が「庭の樹木が家を護ってくれた。」と言った。幼い頃よく木登りをした桐の木やいちょうの木などが、しっかりと根をおろし家を護ってくれた

のかもしれない。今、何事もなかったように復興した町並みを見るにつけ、当時の事を思い出すと胸が詰まる。

山梨の人達とも、もし地震が起きたらという事を話しあった。私の畑のある韮崎市の山間の小さな地区では、皆声をそろえて「生命があれば、どうやってでも生き

ていく。」とさざっと話す。皆、水はどこにあるか知っているし、共同の炭焼き小屋では今でも炭を焼いて使っている。皆農家だから食物には困らない。第一、地域の人達は家族のようで、いまだに助け合いの精神が生きているのだ。そういえば阪神淡路大震災の時も一番早く地力で立ち上がったのは淡路島南淡町の人達だったと記憶している。農村の強みというか、皆が結束して生き埋めの人をすべて助けだし、いち早く炊き出しを自分達で始めたのだ。これも自然と共に皆が協力し力強く生きている田舎ならではの良さであると思う。

都会と田舎を往復する私達夫婦は、二十一世紀の都会はもう少しゆとりのあるまちづくりがなされてほしいと思う。自然との会話が少ない都会での暮らしでは、ただ便利便利と日々をすごしているが、人の生命を護るには大変不便な暮らしをしているのではないと思う。今、求められているのは、そこに暮す一人一人が地域を知り、



震災復興事業でおしゃれな街並みが蘇生 芦屋中央地区



六甲の山並みと松並木が美しい芦屋川畔